

日本における東アジア学の現状と課題

小峯和明*

Ⅰ 抄 録 Ⅱ

日本の古典文学を中心に、東アジアの比較研究を行っている立場から、以下の提言を行った。東アジアの範囲を19世紀以前（前近代）の「漢字・漢文の文化圏」としてとらえる。日本の古典研究は、中国古典との比較だけに焦点が当てられ、韓国やベトナムの古典はまだ充分認識されておらず、「東アジア文学史」の構築が急務である。西洋に対抗して出来た「東洋学」の成果を受け継ぎつつも、より現実的な文化交流にもとづく「東アジア」学が必要である。また、比較文学の方法も日中や日韓の一对一对応ではなく、多面的で重層的な比較研究が重要な意義を持つ。さらに、多文化交流をふまえた新概念の「交流文学」と「比較文学」とを合わせた方法論を提起した。

【キーワード】 漢字・漢文文化圏 東アジア文学史 比較文学 交流文学

Ⅰ 目 次 Ⅱ

- | | |
|-------------------|----------------|
| I. 今、なぜ「東アジア」か | IV. 比較文学と交流文学 |
| II. 「東洋」から「東アジア」へ | V. 東アジア文化講座の構想 |
| III. 〈漢字漢文文化圏〉から | |

I. 今、なぜ「東アジア」か

1. 東アジア研究の隆盛

私は、日本の古典文学（主に説話、物語）を専攻するが、近年、「東アジア」の古典との比較研究を課題としており、その立場から報告したい。

近年、日本では「東アジア」を書名につけた書籍の公刊があいついでいる。近隣国家間の緊張関係を背

* 日本 立教大学 名誉教授 / komine@cronos.ocn.ne.jp

景に多方面から関心が高まっていることに起因するのであろう。人文系では歴史学を筆頭に、文化・文学系にも及んできている。グローバリズムの動向から、研究も国際化への意識が高まり、一国内に限られた研究ではもはやどうにもならない閉塞状況への認識が共有され、その打開策の一環として、各分野から「東アジア」のフィールドが注目されてきたと言えるが、それに比して文学研究の対応はきわめて遅れている。

その証拠に、すでに中国や韓国では書かれている「東アジア文学史」が、いまだに日本では作られていないし、問題にさえ上がってこないことが挙げられる。

2. 「東アジア」の範囲

ここでは、「前近代」（19世紀以前）の古典研究の立場から、「東アジア」の枠組みの基本に、「漢字・漢文」という文字言語（表記、表現、文体）を据えたいと思う。「東アジア」＝〈漢字・漢文文化圏〉という規定である。一般的には、「東アジア」といえば、中国、朝鮮半島、日本が中心となるが、前近代の〈漢字・漢文文化圏〉を基軸にすると、ベトナムまでがその範囲に入ってくる。ベトナムは、今は東南アジアのイメージが強いが、もともとは〈漢字・漢文文化圏〉にあったことが一般には忘れられている。同時に、ベトナムは北方と南方からの仏教伝来の交差点としての意義をも持っている。また、沖縄は独立した「琉球王国」として、日本とは別個に対象化する必要が出てくる。

「東アジア」も時代によって変化するわけで、決して固定化したものではなく、関係概念としてあることに留意したい。

3. なぜ、「東アジア」か

日本文学研究の現状は、依然として旧態然とした時代割りやジャンル割りによる学会が主導しており、その枠内に研究主体としてのアイデンティティをもとめる研究者も少なくない。文学は、各国の言語に即した「国文学」として研究も閉塞化しやすい。従前の「国文学研究」の保守的状況を打開するためにも、一国内を脱した広域の文化圏への視界が不可欠で、「東アジア」はひとつの有効な鍵になるだろう。いわば、各地の「国文学」同士の連携の模索である。そこに「東アジア」をまとめて見る必然性があり、その鍵は漢字・漢文の文化圏にある。

特に留学生との縁で実際に韓国に行くようになって、いかに朝鮮古典に無知であるかを思い知らされた。中国との比較ばかりで間の朝鮮半島を飛ばしていたことを猛省しており（無知、無理解は結果として排除につながる）、日本で知られている朝鮮古典がきわめて少ない現状を打破したいと考えている。

「東アジア」は研究上の戦略的な概念として、今日の研究を活性化しうる磁場となっているとみることができる。

Ⅱ. 「東洋」から「東アジア」へ

1. 近代と前近代、文化の共有

漢字・漢文の共有圏として括りうる地域の文化圏の考察は、グローバルな路線に向かうためにも、まず起点となるべき緊急の課題と考える。19世紀以降の近代化の問題として研究を推し進める立場も当然あるが、たとえば今日の沖縄問題の本質が、前近代の琉球王国時代から検証し直さなければ見えてこないように、あくまで前近代の視野からとらえていくべきだろう。要は近現代の考究のためにも、前近代の検証が欠かせないはずである。

19世紀以前の前近代の東アジア概念は、中国を中心とする冊封・朝貢体制を基軸に、漢字漢文、律令体制、儒教、仏教や道教の宗教等々、共有点があげられているが、より具体的に言えば、文字を書くのに筆・墨・硯を使い、食文化では箸を使って米を主食とする、音楽の楽器で笛や琴、琵琶、太鼓を使う等々、いくつもの共通する特徴をあげることができる。

その意味でも最初の西洋との出会いである、16世紀の「大航海時代」（キリシタン時代）が意義をもつ。19世紀に本格化する近代化の入り口が16世紀であった。今回はふれられないが、現在の私の研究の焦点は16世紀前後にある。

2. 三国観の葛藤

たとえば、西洋と出会う以前の日本は、天竺（インド）・震旦（中国）・日本の三国観がまず基本にあり、それが当時のアジアにおける全世界でもあった。朝鮮半島は中国と日本のはざまで中国とのつながりで概括されることが多く、現実的には種々の交流や交渉があったにもかかわらず、三国観のなかに独立したかたちで正当に位置づけられることがなかった。

また、日本では13世紀に描かれた天竺の地図が現存するように、世界的な視野を獲得した国際性の面と、一方で日本を優位に置こうとする面との相克、緊張が続く。グローバリズムとナショナリズムの葛藤ともいえる。

現実的な対中国観を、インドを媒介に相対化する意味もあり、梵語・漢語・和語を一体とみる言語観もあったし、インドですでに仏教が廃れていたのに反して、「粟散辺土」（粟粒のような小さな辺地）という国土観（劣等意識）を負いつつ、日本は仏教が隆盛を迎えているのは日本の神々の加護によるのだ、という神国観（優越意識）が形作られたりする。

3. 「東洋学」の意義

三国観は仏教という宗教思想上の骨格を背景にした、きわめて観念的な世界観であり、それによって「東洋学」なる学の形成も可能になった、と言える。人文学において「東洋哲学」、「東洋思想」、「東洋史」、「東洋美術」などの分野が確立し、大学の学科編成にも組み込まれた。しかし、「東洋文学」という括りはほとんどなかった。「文学」がいかに「国文学」というナショナリティに立脚しているかがよく分かる。そこには言語の差異が根深い問題としてあるだろう。

しかし、「東洋学」の担ってきた意義は決して軽くはない。その背後に「西洋学」(洋学)の急速な普及と進展があり、「西洋」と「東洋」という二項対立的な学問や思想の図式が確立する。たとえば、「印度学仏教学」という分野もあるように、インドが「東洋学」の対象になったのは、仏教が深く関わるからである。特に仏教学が明治期の仏教弾圧から立ち直るために欧米の宗教学を取り入れ、近代的な脱皮をはかったことが大きい。

以上からすれば、三国観から東洋観への変転は、基本的には地続きであり、学問の形成がかような路線でなされたことの意義を再検証すべきであろう。

そして、今日の「東アジア」への視界は、そのような「東洋学」の基本路線を相対化しつつ、より実質的な近隣諸国との交流や政治経済的、文化的な課題を焦点化した結実としてあり、いわば「地域学」として再生している。「東洋学」の解体もしくは変質から〈東アジア学〉へ、という変転が今日の学的状況といえる。

しかし、その一方で一代の碩学・井筒俊彦のように、ギリシア文化をも東洋に含み、中東イスラム、インド、そして「東アジア」を広範に視野に入れて東洋哲学・思想を論ずるような領域化もある。井筒学の意義はイスラム学と仏教学(主に華嚴、唯識、禪)を「共時的構造化」として重ね合わせたところにある(老莊思想も含む)。「東洋学」は中国対朝鮮、日本の基軸を相対化するためにインド世界を必要としたが、井筒学はイスラムを基軸としたが故に、「西洋」も「東洋」も視野に入れることができたのであり、見のがせない業績である。

Ⅲ. 〈漢字漢文文化圏〉から

1. 脱漢字・反漢字の動き

〈漢字・漢文文化圏〉の中心は何といっても中国であり、その文化の威勢が周辺の国々に及んだ。その結果として、周辺の地域は「脱中国化のための中国化」(石川九楊『漢字とアジア』)が必然化した。地域ごとの地政学も関連して、おのずと自国語にあわせて、脱漢字・反漢字の動きが出てくる。「中国化」から「脱中国化」への結実である。

日本の「平仮名」は、早く「万葉仮名」の草書から発展して、10世紀には平仮名の文字を生み出し、11世紀の『源氏物語』をもたらす。一方の「片仮名」も平仮名と併行して漢文訓読の補助記号として習熟し、漢字片仮名交じり文を始め、平仮名とは異なる和漢混交の訓読文体（『今昔物語集』『平家物語』など）を形作った。日本では今日に至るまで漢字と平仮名・片仮名の三種類の文字を使いわけていることの意義を「東アジア」から見ずえる必要があるだろう。

朝鮮のハングルは15世紀、有名な世宗の時代に音韻研究をもとに開発され、母音と子音の文字を組み合わせる、あらたな文字を発明した。当初は普及しなかったが次第に日本の平仮名同様、女文字として浸透し、今日ではハングルが大勢を占め、漢字の使用率がかなり低下しているが、語彙としての漢語はたくさん残っている。

ベトナムのチュノム（喃字）は14世紀に梵語の陀羅尼の音写表記をもとにして発明される。日本で言う「国字」（独自に作った漢字）であり、漢字の表意とベトナム語の音写とを組み合わせた文字である。国策として必ずしも重用されない面があり、19世紀にフランスの植民地となってクオック・グー政策により、ラテン語表記をもとにアルファベットに切り替えられて今日に及ぶが、チュノム文献はかなり残っている。

いずれも表意・表音両用の漢字に対して表音文字を主体に（チュノムは表意文字も併用）、自国語にかなうように開発された文字で、中国化から脱却しようとするイデオロギー的色彩が濃厚で、同時に一般への文字普及を企図したものであった。

また、中国の簡体字への移行をはじめ、縦書きから横書きへの変化を伴い、古典籍を除いて一般書籍の大半は横書きになった。これは漢字・漢文文化の大きな変転といえる。縦書きで書かれた書籍を堅持しているのは今や日本だけかも知れない。

2. 訓読という技法

漢文訓読は、かつては日本だけの専門のような印象が強かったが、まさに「東アジア」共通の手法であり、外国語の漢文を外国語としてではなく、訓読という便法で自国語として読み解いてしまう、アクロバティックな力技であり、一種の技芸である。外国語ができない者の苦肉の手段であり、特異な翻訳法ともいえる。逆に言うなら、漢文でさえあれば、訓読によってどの国や地域の漢文でも、それなりに解読できてしまうわけである。その訓読法から訓読文体も生まれた。筆談ができるのも〈漢字漢文文化圏〉の特徴といえよう。

「漢字・非漢字混交文」は「東アジア」の共通現象であり、ベトナムの喃字も、たとえば漢字と混ぜて6言・8言の歌の形式で表される。漢文訓読が前提になっていることは明らかで、混交文は決して日本特有ではない。韓国でも漢字とハングルを混ぜた写本や刊本が多く残されている。

このような漢字と非漢字を組み合わせた文体、あるいは仮名やチュノムやハングルだけの文章をも合わせた総体が〈漢字・漢文文化圏〉にほかならない。

近代以降、韓国やベトナムでは漢字・漢文は使われなくなっているが、それと意識していなくても語彙としての漢語はたくさん残っていて今も頻繁に使われており、前近代の過去と無縁とはいえない。

IV. 比較文学と交流文学

1. 比較の方法論

「東アジア」の文学研究はまず中国との関連があり、「漢学」「漢文学」がまさにこれであるし、近年は和漢比較研究が盛んである。「和漢比較文学会」という学会もあるが、一般的には、中国と日本を一対一対応させて中国から日本への受容を説く、一方通行の路線が常道であり、結局は日本文学の域内に回収されてしまうことになる。

そうした研究は、結果として日本の特性を主張するための方便ともなりかねない。それは結局、こちらから向こうを見ているだけで、向こうからこちらを見る視座を持たないからである。日本語世界にとどまる限り、日本に偏した研究からついに抜け出すことはできないが、そのような限界を前提にしつつも、中国はもとより、朝鮮やベトナムの古典テキストそのものを読み込み、多面的に比較し、「東アジア」共通の文学事象を発掘することであろう。

さらにここで問題とすべきは、〈比較〉という方法そのものである。学問の基本が分野を問わず比較にあることは、あらためて言うまでもないことだが、その比較とは、何と何を、何のために、どのように比較するのか、不断に検証されなくてはならない。

比較という方法論は、何か抛るべきものがあって、その本性や特性を明らかにするために他と比べるから、本来、一方通行になりやすい。しかし、Aの特徴や意義を言うために、Bと比較するだけでは真の比較とはいえない。逆にAと比較されたBの特徴や意義は何かを同時に明らかにしなくてはならない。双方向からの視角が必要である。

あるいは、AとBだけではなく、CやDなど第三のものとも比較する、比較すべき対象を複数にする複合的な方法も必要であろう。

2. 比較から共有、交流へ

そこであらためて提起される概念が、〈共有〉であり、〈交流〉である。〈比較〉から〈共有〉へ、さらには〈交流〉へ、という論点をここで主張したいと思う。

もはや日本に踏み止まっているだけでは道は開かれない。こちらから向こうへ渡って、向こうの世界や資料とつきあい、向こうからこちらを見る視座を確立しなくてはならない。このことをここでは、〈交流文学〉と呼ぶ。〈交流文学〉とは、実際の多文化交流や異文化交流の所産ではあるが、文学間の関係をも、従来の「影響」や「典拠」などの一方通行型の指向ではない、双方向の多面的な方位からとらえ直すための用語としたい。

単線的な一対一対応の比較ではなく、複合的で輻輳し、重層しあう多層から比較し、「東アジアの文学圏」の何がどう共有しあい、共有しえていないか、何がどうずれるのか、様々な方策をもとめていきたい。比較論は一方の独自性に論が収束しやすい。変容の解明と同時に、なぜそこまで共有しあうのか、交流と共有の解明にも向かわなくてはならない。

3. 研究会による成果

私の「東アジア」研究の要は、各地域ごとの文学を読む複数の研究会にあり、中国、朝鮮半島、ベトナム、琉球それぞれの会を同時並行で展開している。

具体例を二、三あげれば、第一に、2000年代前半に朝鮮漢文を読む読書会を始め、朝鮮古典の始発とされる『新羅殊異伝』の訳注を試み、平凡社・東洋文庫から公刊した(2011年)。10世紀後半頃の作で、編者は不明、「殊異」は「怪異」に同じ。新羅時代の神話や説話を集成、今は散逸して十三話のみ逸文が伝わる。全体像は不明だが、日本神話や中国の志怪小説との関係など、「東アジア」にかかわる世界が展開する。日本では一般的にほとんど知られていなかったもので、訓読をもとに日本語側から注解を加えて読み解き、「東アジア」共有の古典として位置づける試みを行った。

第二に、高麗時代の高僧伝『海東高僧伝』の訳注を同じく平凡社・東洋文庫から公刊した(2016年)。本書は1215年の編で、巻一、二のみ伝わる。以後の巻は不明だが、巻五・尼僧の逸文も残っているから、規模は小さくなかったであろう。僧伝を主体とする仏教史で、古代朝鮮の仏教を知る重要な資料にとどまらず、東アジアの僧伝文学として重要で、中国、日本、ベトナムの高僧伝との比較研究が今後の課題となる。

第三に、現在、中国の北京在住メンバーを中心に「東アジア古典研究会」を発足、明代15世紀に作られた『釈氏源流』を読んでいる。これは南京の宝成の編で、前半は釈迦の伝記、後半はインドから中国への仏教伝来を僧伝中心に語る、全400段からなる挿絵付きの刊本である。全段に「為母説法」といった4字句の表題があり、最初に出典名を明記する。これが広範にひろまり、幾度も改編され、朝鮮、日本、ベトナムに、さらには欧米にまで伝流した、まさに「東アジア文学圏」を代表する述作である。

朝鮮時代にも『釈氏源流』は複数種刊行され、ハンゲルの抄出本『八相録』も複数出ていて、本ごとに翻訳のあり方が変わっていくようだ(19世紀)。また、『釈氏源流』を引き継ぎ、朝鮮への仏教伝来を語る『西域中華海東仏祖源流』も18世紀に作られている。

日本でも訓読を施した本が17世紀に刊行されているが、この系統は挿絵はない。『釈氏源流』が日本にいつ伝わったかは不明だが、16世紀前半の狩野元信による『清涼寺縁起絵巻』の釈迦の伝記部分に、この『釈氏源流』の挿絵が使われていることが美術史の研究から明らかにされている。げんに16世紀末期、豊臣秀吉の朝鮮侵略(壬辰倭乱)の戦後処理で日本にきた僧松雲が持ち帰った『釈氏源流』のテキストをもとに、朝鮮版が出版されている。その本が今は日本の天理図書館に所蔵されるという、書物がたどる数奇な

巡り合わせがある。16世紀の日本に『釈氏源流』が伝来していたことは疑いない。

さらには『釈氏源流』はベトナムでも刊行され、喃字を混ぜた6言・8言の詩の形式に訳された写本も残っているし、18世紀にベトナム独自に編纂、刊行された漢文体の釈迦の伝記『如来応現記』の一本が『釈氏源流』の名になっているものもあるほどだ。

この『釈氏源流』のように、「東アジア」における共有と交流からあらたに問題を立ちあげていきたいと考える。

V. 東アジア文化講座の構想

今まで述べてきたようなことをふまえて、現在、『東アジア文化講座』全4巻（文学通信社）を編集中で、現在、校正の段階である。編者は、金文京（中国文学）、染谷智幸（日本近世文学、朝鮮文学）、ハルオ・シラネ（日本古典文学）、小峯和明（日本古典文学、東アジア比較説話）の4人。各巻のテーマは以下の通り、1巻につき、40人前後の執筆で、全部合わせて170人ほどの執筆陣になる。

第1巻「東アジアの文学と異文化交流」

第2巻「東アジアの漢字漢文文化圏」

第3巻「東アジアの文学圏」

第4巻「東アジアの環境と風俗」

第1巻は異文化交流と文学の関係、第2巻は〈漢字・漢文文化圏〉における文字や文章、文体、第3巻は文学世界から、第4巻は環境や風俗、をテーマとする。ここでは特に私が直接編集した第3巻「文学圏」について述べておきたい。

全体を大きく、第1部「学芸」、第2部「宗教と文学」、第3部「侵略と文学」、第4部「歴史と文学」、第5部「文芸世界」の全5部に分けて、それぞれ個別の問題を展開している。

現在校正が最終段階まできており、年内には公刊の予定である。

以上、時間の制約もあり、充分意を尽くせないが、ここで述べたことを基本として、『東アジア文学史』をまとめることを今後の究極の課題としたいと思う。

〈参考文献〉

王曉平、『亜州漢文学』、天津人民出版社、2001。

張哲俊、『東亜比較文学導論』、北京大学出版社、2004。

- 趙東一著, 豊福健二訳, 『東アジア文学史比較論』白帝社, 2010年 (ソウル大学出版部, 1993).
- 金文京, 『漢文と東アジア—訓読の文化圏』, 岩波新書, 2010.
- 石川九楊, 『漢字とアジア』, ちくま文庫, 2018年.
- 石井公成, 『東アジア仏教史』, 岩波新書, 2019年.
- 井筒俊彦, 『意識と本質—精神的東洋を求めて』, 岩波文庫, 1991 (初版1983年.)
- 井筒俊彦, 『意味の深みへ—東洋哲学の水位』, 岩波文庫, 2019 (初版1985年.)
- 井筒俊彦, 『コスモスとアンチコスモス—東洋哲学のために』, 岩波文庫, 2019 (初版2005年.)
- 小峯和明, 増尾伸一郎編訳注, 『新羅殊異伝—散逸した朝鮮古典』, 平凡社・東洋文庫, 2011.
- 小峯和明, 金英順編訳注, 『海東高僧伝』, 平凡社・東洋文庫, 2016.
- 小峯和明編, 『漢文文化圏の説話世界』, 竹林舎, 2010.
- 小峯和明編, 『東アジアの今昔物語集』, 勉誠出版, 2012.
- 小峯和明編, 『日本文学史』, 吉川弘文館, 2014.
- 小峯和明編, 『東アジアの仏伝文学』, 勉誠出版, 2017.
- 小峯和明監修, 『日本文学の展望を拓く』, 全5巻, 笠間書院, 2017.

* 이 논문은 2020년 11월 27일에 투고되어,
2020년 12월 15일에 심사위원을 확정하고,
2021년 1월 4일까지 심사하고,
2020년 1월 8일에 게재가 확정되었음.

■ Abstract ■

The State of East Asian Studies in Japan

Komine Kazuaki*

From the perspective of comparative studies of East Asia, this article suggests the following ideas. This first is to take “East Asia” as the cultural sphere of Chinese characters and writing from ancient times to the early modern times (namely, premodern times). The Classical Studies in Japan tend to focus on the comparison with Chinese classics solely and failed to get enough knowledge of Korean classics and Vietnam classics. Hence, it is urgent that History of East Asian Literature should be constructed. East Asian Studies based on the outcomes of Oriental Studies and the actual intercultural exchanges has become necessary. As for the methodology of comparison, it is important to carry out a multifaceted and multi-layered comparison instead of a single-line, one-to-one comparison. This article also brings up a methodology that combines “Exchange Literature”, a brand-new concept coming into being in the multicultural and intercultural exchanges, with the concept “Comparative Literature”.

[Key Words] Chinese Characters and Writing East Asian Literature Comparative Literature
Exchange Literature

* Honorary Professor, Rikkyo University, Japan